

活動レポート

エゾシカ研究会

文責：エゾシカ研究会 沼田光弘

「エゾシカ問題の解決に向けて～ハンターの視点から～」

1. 概要

11月に第4回定例研究会が開催され、「エゾシカ捕獲の現場から～ハンターによる視点～」と題して話題提供を行いました。概要は下記の通りです。

・日 時：2012年11月9日(金)

18:00～20:00

・場 所：札幌市 エルプラザ 2階 特別会議室

・出席者：会員13名、外部専門員2名、計15名

2. はじめに

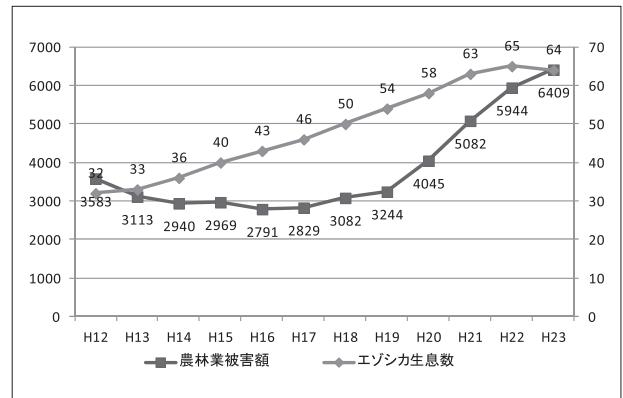
私は現在、農業協同組合に関する営農指導業務を担当し、今年度、エゾシカ研究会に入会した技術士です。仕事柄、農家の皆さんと話をすると必ず出てくる話題が「農作物がエゾシカの被害を受けて困っている」というものです。どんな課題であっても何らかの解決策があるはずなのですが、色々な問題があって難しいというのが農家の皆さん共通の意見でした。話を聞くだけではわからない、シカを獲るのがどれだけ大変なのかとりあえず自分で確かめてみよう、こうしてハンターの世界へと足を踏み入れたことで、今まで見えなかった問題の本質が次第に明らかになってきました。

3. 生息数が減っているのに被害が増える？

図1はエゾシカの推定生息数とエゾシカによる農業被害額の推移をグラフにしたものです。

平成23年度のエゾシカの推定生息数は64万頭とされており、前年よりも1万頭減少しています。一方で農業被害額を見てみると前年よりも4.6億円増加していることがわかります。頭数が減っているのになぜ被害が増えるのでしょうか？

エゾシカの狩猟期間は10月1日から3月31日までとなっており、農作物の収穫が一段落した秋から冬がハンターの狩猟による捕獲が認められている



【図1】

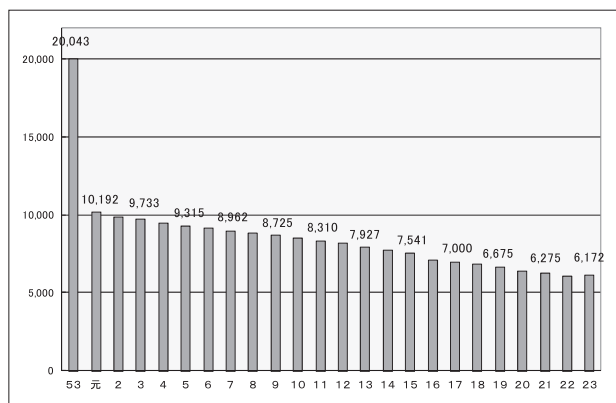
期間です。これ以外の期間、いわゆる農作物が実っていて、エゾシカの食害を最も受けやすい期間には法律で狩猟が禁止されているのです。狩猟期間以外にも有害鳥獣駆除による捕獲が行われていますが、これは一部のハンターにしか認められていません。畑や森林に防護柵を設置してエゾシカの侵入を防ぐという対策もありますが、結局はシカが右から左に移動するだけです。近年、エゾシカと車の衝突事故が増加していますが、個体数がそれほど減っていないことに原因があると考えられます。やはりエゾシカを捕獲しなければ問題の解決にはつながらないということがわかりました。

4. ハンターを取り巻く様々な規制

図2は北海道内の狩猟者登録者数の推移です。エゾシカを捕獲する狩猟者が30年間で半分に以下になり、さらに年々減少する傾向にあることがわかります。

理由としてはハンターの高齢化が指摘されていますが、その根底には高齢ハンターから新人ハンターに至るまで、様々な負担や規制があることに起因しています。

まずハンターになるためには、狩猟鳥獣を捕獲す



【図 2】

る「狩猟免許」と鉄砲を所持するための「銃砲所持許可」の 2 種類の免許を取得することが必要です。

特に大変なのは銃砲所持許可です。銃砲所持許可を受けるには「筆記試験」とクレー射撃で一定数の的中を条件とする「技能検定」という 2 つの関門をパスしなければなりません。この後も精神系病院での健康診断、書類提出や面接などで何度も警察に通い、さらに身辺調査や自宅訪問が行われ、鉄砲を手にするまでに最短でも 6 ヶ月がかかります。さらにその後も毎年 1 回行われる銃検査と 3 年毎の所持許可更新という大きな負担がハンターに重くのしかかってきます。また、銃刀法の規制はとても厳しく、もし銃を車内に置きっぱなしにしたり、日の出前や日没後に発砲するとただちに検挙されます。こうしたことにすべて対応できなければ、銃を持つことは許されません。警察としては銃による犯罪や事故を防ぐことが最大の目的なので、銃を持つ人間をきちんと管理しておきたいというのはわかります。しかし、一方で銃所持に関する規制や負担がハンター減少の原因になっているのも事実なのです。

5. エゾシカを獲る人間をどう育てるか

鉄砲があるからといってすぐにエゾシカが獲れるわけではありません。始めは猟友会のメンバーと一緒に狩猟に行って、エゾシカのいる場所や撃ち方を教えてもらいました。初心者の方にはどこにエゾシカがいるのか全然わかりませんが、ベテランのハンターは森の中に隠れているエゾシカを見つけ出し、300m 先にいる獲物をライフル銃によって一発で仕留めます。獲物の解体にしても、エゾシカのどこをどう切ったらいいのかわからずオロオロしている

私を尻目にベテラン達はあっという間に獲物を肉の塊に仕上げていきます。やはり 1 人前のハンターになるにはそれなりの経験を積まなければなりません。年々ハンターが減少している中でエゾシカを獲るための新たな担い手を育てる必要がありますが、そのためには長い時間がかかります。今のままではハンターの方が「絶滅危惧種」となりかねない状況です。



6. 撃つよりも大変なこと

最近の銃はとても性能がよくなっています。新人ハンターの私でもハーフライフルという種類の銃を使用して 50m 程度の距離ならほぼ確実にエゾシカを捕獲することができます。ただ、問題なのは撃った後のエゾシカの処理です。エゾシカ 1 頭の重さは何十キロもあります。さらに肉をとった後の残滓（ざんし）を山中に放置するとクマを引き寄せる危険があるので適正に処理することが義務付けられています。その方法としては、捕獲・解体した場所に残



滓を埋めて処理することが多いのですが、スコップでの穴掘り作業等に相当の労力を必要とするので1日に獲れる頭数には限界があります。また、冬の場合はシカの首にロープをかけてスキーで引っ張りながら急斜面を降ります。木にぶつかったり、穴に落ちたりと大変です。法律なので仕方ないとはいえ、ここまでしなければならないのかといつも思います。

7. エゾシカの活用に向けた提言

では、せっかく獲ったエゾシカをどう活用していくか考えてみましょう。ここで必ず出てくるのがエゾシカの肉が美味しいか、まずいかといった話ですが、どんな食材でも独特の風味や香りがあるのは当然のことであり、野生鳥獣の肉にはその特徴が強くあらわれます。それをおいしいと感じるかどうかは個人の嗜好に左右されるものであると同時に、料理や加工の仕方である程度は解決することができます。

それよりも重要なのはエゾシカ肉の品質が安定しているかどうかです。エゾシカは年齢、雌雄、食性、捕獲状態によってその肉質が全く異なります。立派な角を持つ大型のオスは繁殖期には臭いがきつくなり、食材としては好まれません。その一方で、落ちたリングやニンジンを主食にしていたエゾシカ肉がとても美味しかったという話を聞いたことがあります。また、1発で仕留められずに走り回ったシカの肉は血が回ってしまって美味しくないというのがハンターの常識です。食材全般に言えることですが、とにかく品質が一定していることが絶対条件です。養鹿の場合は同一条件で飼養しているので、品質が均一化されるメリットがありますが、野生のままに生きているエゾシカでは当然肉質もバラバラです。もちろん生産履歴もトレーサビリティもありません。前回食べた肉は美味しかったが、今回の肉はまずかったということが続けば、消費者から見向きもされなくなる心配があります。また、近くに処理場がある場合を除いて、ほとんどのハンターは山の中で解体するので衛生管理といった点でも不安が無いわけではありません。国際基準を満たしていないハンター肉では当然輸出は難しく、今後のビジネス展

開という点では難しいと思います。



8. おわりに

エゾシカを肉だけでなくもっと違った視点で活用することができないのか検討を進める必要があります。日本国内では薬事法の規制がありますが、シカの角が漢方薬の原料になるのは周知のとおりです。また、なめされた皮はとても上質であり様々な製品として活用できます。また、極寒の大地を生き抜くエゾシカには未だに知られていない秘められた力があるような気がいたします。もしかするとその内臓等には人間の健康に有用な成分が含まれているかもしれません。今後の試験や研究が待たれるところです。

また、ハンターがエゾシカを獲るためのインセンティブも必要不可欠です。例えば道東の滝上町では行政が冬期間の林道除雪や残滓回収を行っており、ハンターがエゾシカを捕獲しやすい環境を整えています。このことによって滝上町におけるエゾシカの捕獲頭数は大きく増加しました。また、エゾシカの捕獲には車の燃料代や弾代といった経費がかかりますが、こうした経費に対する助成措置があるとハンターとしては大変ありがたいです。エゾシカの有効活用と捕獲のための環境整備を複合的に実現することが問題の解決につながるものと思います。

害獣と言われるエゾシカですが、実は北海道が誇る唯一無二の資源といっても過言ではないかもしれません。これからもハンターとして、エゾシカと共存できる社会の実現に向けて自分がやれることをやっていきたいと考えております。